

受身・使役の助動詞の意味用法について

——『万葉集』と『元朝秘史』にみられる用例をめぐって——

BAASANKHUU G.

はじめに

日本語とモンゴル語は言語構造がよく似ており、基本文型は〔S+O+V〕である。従って、文法現象において両言語は類似点が多く、様々なところに共通の発想がみられる。

本稿の目的は、両言語における受動文と使役文の語法・意味用法を検討し、それぞれの使用の実態を明らかにすることである。主な作業として、各言語において、最も古い資料である『万葉集』と『元朝秘史』^①の用例を調べ、その用法を対比させて分析を行う。

『万葉集』の用例は日本古典文学大系『萬葉集』（岩波書店）により、用例の読みは『万葉集総索引』、佐竹昭広・木下正俊・小島憲之『万葉集』（塙書房、1963）を参考にし、語法に関しては小路一光（1980）、吉田金彦（1973）を主に参考とした。『元朝秘史』は四部叢刊本の漢字音訳モンゴル語のローマ字転写をもとに、ローマ字転写と転写テキストは小澤重男（1984～1989）『元朝秘史全訳』（上・中・下）、『元朝秘史全訳続攷』（上・中・下）による^②。『元朝秘史』の用例表示は、巻数・行数を漢字で、葉数をローマ記数で表記する。例えば、（五七六）は、第五巻の第7葉の六行目のことを示す。

1. 先行研究

日本語の受動態については、従来、動作・作用が主語に対して直接的に関わるか、間接的に関わるか、述語動詞が自動詞か他動詞か、動作主が有情物か非情物か、利害の意があるか否かなど様々な観点から考察されている。

受身の歴史を論ずる際に、非情物を主語とする「非情の受身」がしばしば問題にされる。「利害の受身」は古代語・近代語を通じて現れる最も一般的な受動表現であるのに対して、「非情の受身」は国語本来の純正な表現ではなく、

近代以降に欧文脈の影響で翻訳体によって導入されたものと言われている。

この説を否定する立場、即ち「非情の受身」も古典文献にかなり存在していたことについて宮地（1968）をはじめ、小杉（1979）、清水（1980）等の研究があり、利害の受身と同様に伝統的な表現形式の一つと主張されている。

使役形の「シム・ス・サス」の成立事情、その本質については、従来の研究では、あまり大きな見解の相違はないが、使役文の構造（格助詞）、その表す意味内容（許可・強制）や他動表現との相互関係について議論されてきた。

従来の研究では、受動形の「ル・ラル」（現代語で「(ラ) レル」）は受身・自発・可能・尊敬の意味、使役形「シム・ス・サス」（現代語で、「(サ) セル」）は使役・尊敬の意を表すことや、常に動詞語幹と強く結びついて、ほとんど一体化した形を作るという他の助動詞と異なる性格を有することは注目され、諸用法の意味分化、その共通性等は大きな課題となり、その性格の解明が進められてきた。

続いて、『元朝秘史』について簡単に述べる。『元朝秘史』の日本における研究は、那珂通世の邦訳注『成吉思汗^{チンギス・カン}実録』（大日本図書株式会社、1907）をはじめとし、服部四郎・都嚶爾扎布『蒙文元朝秘史卷一』（文求堂、1939）の蒙古字転写本が発表され、これを機に、『元朝秘史』の原典に関する研究が展開されてきた。

言語学面では、音韻学（母音・長母音）やモンゴル語の漢字表記に関する問題、文語の語彙・語法的な特徴など、その性格を明確にする試みが行われている。

2. 現代モンゴル語の受動形と使役形

	モンゴル語	日本語
受身	「-gda-」	「(ラ) レル」
使役	「-ûl-」	「(サ) セル」

形式：【動詞語幹＋接尾辞＋語尾】

モンゴル語の受動文は日本語と同じく、対応関係のある能動文をもつ。

[1] 【能】 a. Tsagdaa gemt xeregten-g bari-x

警察 (は) 犯 人 を つかまえる

【受】 b. Gemt xeregten tsagdaa-d bari-gda-x

犯 人は 警察 に つかまえられる

【使】 c. Gemt xeregten-g tsagdaa-gaar bari-ül-ax

犯 人を 警察 で (に) つかまえさせる

能動文の対格名詞句「gemt xeregten」が [1b] では主語の位置に移動して動作主の「tsagdaa」は「ニ格」(与位格)を伴い、動詞語幹「bari-」には受身の接尾辞「-gda-」が付き「bari-gda-」と受動形になり、受動文が成立する。

使役文は [1c] のように、動作の対象が「ヲ格」を伴い、動詞語幹「bari-」に使役の接尾辞「-ül-」が接続し「bari-ül-」と使役形になり、使役文が成立する。

この様に、日本語と似ているところがあるが、異なる言語であるため、相違点もみられる。大きな相違点は、モンゴル語の受動文は受身の接尾辞「-gda-」の他に、使役の接尾辞「-ül-」によっても表示されることである。即ち、日本語の受動文は受身の助動詞「(ラ)レル」のみで表示されるのに対し、モンゴル語では受身と使役の両方の接尾辞で表現するのである。

モンゴル語では受動態はあまり発達しておらず、日本語では受動形で示すような場合でも、モンゴル語では受動形で表現するのを避けるケースがある。

又、「xii-gde- (される)、mede-gde- (知られる)」のように他動詞が受動形による受身的な用法を持つのは当然であるが、受動形となるのは「ura-gda-x (破れる)、yala-gda-x (負ける)、yaba-gda-x (行われる)」のような自動詞的なもの、「xara-gda-x (見える)、sonso-gdo-x (聞こえる)」のような自発的な意のもの、「ajild dara-gda-x (仕事に覆われる)、üert abta-gda-x (洪水になる)、öbçind nerbe-gde-x (病気にかかる)」のような自然現象や外部からの非意図的な働きかけによる被害の意を表すものがほとんどである。

さらにモンゴル語では、動作主が完全に背景化された状況状態性の陳述文及び説明文としても受動形が使われる。但し、日本語では《金閣寺は義満によって作られた》と動作主を文中に置くことが可能であるが、モンゴル語では文中に動作主を置くことは難しい。

又、日本語では《両親に死なれる》等と自動詞から受動文を作ることが可

能であるが、現代モンゴル語では「両親に」と与位格名詞を主語に置くこのような受動文は成立しない。

以上をまとめると、現代モンゴル語では使役形は使役・受身の意味を表し、その用法範囲が広く、発達している。これに対し、受動形の用法はかなり狭く、受動形で表現するのは、自然現象や自発的なものに偏っていると言える。

3. 『万葉集』にみられる受動形と使役形

3.1. 受動形

上代語においては、受身・自発・可能の助動詞として「ユ」「ラユ」が主に使用され、「ル」は受身の助動詞として、「ユ」と平行して用いられていた。各受動形の用法状況と用例数を以下に示す。

表 1

	ユ	ラユ	ル	ラル	合計
自発	25 例	—	4 例	—	29 例
可能	24 例	13 例	1 例	—	38 例
受身	44 例	—	11 例	1 例	56 例
合計	93 例	13 例	16 例	1 例	123 例

上表からみると、「ユ」は用例が最も多く、その用法も発達しているのに対し、「ル」はかなり少なく、受身の用法に偏っていることがわかる。「ラユ」は僅かな用例が存在するが可能の用法のものばかりであり、「ラル」は未発達で用例は一例のみである。

それでは、各助動詞を意味的に、a. 「自然にそうなる」ことを表す【自発】、b. 自発から展開した【可能】、c. 動作・作用の影響を受ける意の【受身】にわけ、その具体的な用例の使用状況を考察する。

3.1a. 【自発】「おのずからそうなる」という意味を表す。『万葉集』にみられる自発の意の受動文では、専ら「ユ」が用いられていて、「自然と～する状

態になる」の意味を表す。

中でも、動詞「泣かゆ」（終止形）の用例が最も多く、その全てが「哭のみし泣かゆ」の形で一つの慣用語となっていたと思われる。

[2] かにかくに思ひわづらひ哭のみし泣かゆ〔祢能尾志奈可由〕（八九七）

[3] 五年住ひつつ都の風習忘れえにけり〔和周良延尔家利〕（八八〇）

[4] 吾妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ〔奈伎志曾母波由〕（四三五七）

泣こうとする意志がないのに、ひとりでに涙が出てくるという悲しみの感情、忘れたくないものをいつの間にか忘れてしまうという寂しさの訴え、慕わしく恋しくなる気持ちなど、何らかの今の状況を契機として、自分の心が自然とある状態になってくることを表す。

3. 1b. 【可能】主題名詞句が述語動詞の表す動作・作用をすることが可能であったり、する能力を有していたりすることを表す。

一般に、人は意志に随って行動するものであり、例えば、思い出そうとすれば思い出すことが可能であり、人間は意志すれば、それに随って行為を可能にする能力を備えている。しかし、思い出そうとしても思い出されない場合があり、それは何らかの妨げるものの働きによるのである。「自然にそうなる」という自発的行為を否定して、「自然にそうならない」ことを表現すれば「不可能」の意味につながってゆく。

可能の意味の「ユ」「ラユ」は動詞「忘る」「寝」の未然形に付いて、「忘れえ」「寝らえ」となり、さらに打消の表現が付いて不可能を表す用法が固定化し、意志のままに実現できない、不可能な状態を表している。

[5] 夢見むとわれは思へど寝ねらえなくに〔不所寐〕（二四一二）

[6] 袖さへ濡れて忘貝拾へど妹は忘れえなくに〔不所忘尔〕（三一七五）

[7] 里まで送り来る君が心は忘れゆましじ〔和須良由麻之自〕（四四八二）

以上のように、自発及びそれに対応する自発的行為の否定（不可能）では、何れも「おのずと忘れてい」「自然と泣いてしまう」「寝ることができない」等と（人間の心情では）自然と生じてくる、又は生じてこない心理・精神的

な状態のものばかりである。

受動形が自発から展開して可能の意を表すことについて、大野（1967）では、古代日本人にとっては動作が自然成立したか、それとも作為的に成立したかは重要であり、その区別が（「ス」の使役表現に対して）受動表現によって表されていたとしている。受動文で表現される可能は、自発の否定的用法から発達し、可能表現として否定を伴わないで独立して用いられるのは、中世に入ってからである。

3. 1c. 【受身】受身表現は、周知の通り、普通は有情物が主語となり、他動詞的動作の主体とその動作を受ける対象との関係が「二格」で表示され、主語の有情物が利害を蒙る意を伴うことが主である。それに対し、非情の受身の場合は主語が非情物のため、利害の意を伴わない。

[8] 八衢にものをそ思ふ人に知らえず [人尔不知所] (一〇二七)

[9] 腰にたがねてか行けば人に厭はえ [伊等波延]、かく行けば人に憎まえ
[迹久麻延] (八〇四)

[10] 天雲の向伏す國の武士と云はるる人は [所云人者] (四四三)

[11] 沫雪に降らえて咲ける梅の花 [所落開有梅花] (一六四一)

[8] は、「私がある事柄を人に知られる」となれば主語は有情物であるが、「ある事柄が人に知られる」となれば主語は非情物になる。『万葉集』では、非情物を主語とする受動文が若干存在するが、話し手は非情物より有情物に視点を置きやすい（金水（1992⁹⁾）。とすれば、これは有情物の受動文とみるべきかもしれない。[10] のように、話し手及び作者にとって動作主が問題とされず、改めて表現上に持ち出す必要がない場合、主体は背景化され、省略される。

古代では、[11] のように風・波などの自然現象を主語とし、何（誰）による動作・作用かを問題とせず、残された結果、状態の存在を話題とする非情の受身が受動文が多く存在する。

3. 2. 使役形

上代語では、使役助動詞として「シム」が主に用いられていたが、「ス」の使役表現としての用例も少数ながら存在する。『万葉集』にみられる使役形の「シム」「ス」は単純な使役の意を表すものばかりで、尊敬の用法は未発達であった。

[12] 雨降らば着むと思へる笠の山、人にな着しめ〔莫令盖〕(三七四)

[13] 今の墾道、刈株に足踏ましむな〔安思布麻之奈奈〕(三三九九)

[14] わが恋ふる人の目すらを相見しめなく〔不令相見〕(一九三二)

吉田(1973)では[12]を使役から尊敬の意味に移行していく過程的用法として貴重な例とし、対人関係の表現は価値観・待遇感情を伴いやすいため、このような「ナ～シメ」形の使役の禁止表現から尊敬語法が展開したと指摘されている。

以上、奈良時代においては、使役では「シム」、自発・可能では「ユ」「ラユ」、受身では「ユ」と「ル」で表されるが、上接動詞はかなり限定されており、そのほとんどが表現的に固定化していたと考えられる。

4. 『元朝秘史』にみられる受動形と使役形

第2章では現代モンゴル語の受動文と使役文について述べたが、文語では、両者の意味用法は現代語とはかなり異なっている。

13世紀初めに成立したとされる文語では、受動文には「-gda-」形の他に「-da-」形が、使役文には「-ül-」形と「-ga-」形⁽⁴⁾が用いられていて、現代口語とは異なる。特に、『元朝秘史』には現代語には全くみられないタイプの受動文、使役文が存在する。日本語の受動形が自発・可能・受身(・尊敬)を、使役形が使役(・尊敬)を意味すると同様に、モンゴル語文語の受動形には受身の他に自発・可能・尊敬、使役形には使役以外に尊敬・自発の用法があったと思われる。

『元朝秘史』では、受動形は一一四語、使役形は一八七語が見出せる。各接尾辞の動詞接続状態を次に示す。()内は延べ語数である。

表 2

接続 語幹	受動形			使役形		
	-gda-	-da-	合計	-ûl-	-ga-	合計
自	14 語 (28 例)	6 語 (29 例)	20 語 (57 例)	98 語 (202 例)	33 語 (179 例)	131 語 (381 例)
他	69 語 (213 例)	25 語 (68 例)	94 語 (271 例)	37 語 (178 例)	19 語 (78 例)	56 語 (256 例)
計	83 語 (241 例)	31 語 (97 例)	114 語 (328 例)	135 語 (380 例)	52 語 (257 例)	187 語 (637 例)

受動形では「-gda-」形が「-da-」形よりも圧倒的に多く、使用頻度がかなり高いことがわかる。普通は、両者は他動詞に接続して、「**uqa-gda-**（わかる）、**bara-gda-**（済む）」等と自動詞的或いは自発的な意の動詞を形成するが、文語では、自動詞にも接続し、「**ire-gde-**（来られる）、**kür-te-**（到られる）」等と受身的な意味を表す用例が存在する。

使役形の場合は、「-ûl-」形が多く、自動詞・他動詞に自由に付き使役的な意味が強い。一方「-ga-」形は自動詞語幹（三三語）に下接して他動詞を形成することが多く、使役性より他動詞的な性質が目立つ。そのため例えば、「-ga-」によって作られた他動詞「**gar-ga-**」（出す）に、更に「-ûl-」を付けて「**gar-ga-ûl-**」（出させる）とし、使役性を強調することなどがよくある。各接尾辞の意味用法の状況を「延べ語数」で示す。

表 3

接尾辞		自発	可能	受身	尊敬	使役	合計
受動形	-gda-	2 例	17 例	218 例	1 例	3 例	241 例
	-da-	10 例	15 例	50 例	12 例	—	87 例
	計	12 例	32 例	268 例	13 例	3 例	328 例
使役形	-ûl-	5 例	—	10 例	2 例	363 例	380 例
	-ga-	1 例	—	—	4 例	252 例	257 例
	計	6 例	—	10 例	6 例	615 例	637 例

受動形では、受身的な意のものが最も多いが、少数ながらも自発、可能、そして尊敬、使役の意を表す用例が存在する。

一方、使役形では、「-ga-」形は使役と受身にしか用いられないのに対し、「-ûl-」形は派生接尾辞として最も生産力が盛んで、自発、尊敬の意をもつも

のも存在しており、用法範囲の広いことがわかる。

4.1. 受動形

受動の「-gda-」形と「-da-」形を、a. 自発、b. 可能、c. 受身、d. 尊敬、e. 使役と意味用法により分類し、それぞれ具体的な用例をあげながら考察していく。

4.1a. 【自発】自発の意では、動詞「bol-」(なる)の受動形「bol-da-」(なられる)の用例が多く、そのほとんどが「jilda bol-da-」、「baru'ân bol-da-」であり、この形で自発の用法はほぼ固定化していたと考えられる。

[15] teden-dür ungšilalduju ungšiju jilda boldaju (四34九)

彼等に 呼びかけ合って、大声で話し おそく なられて

[16] tede haran baru'ân boldaju baiyiju qočorba (二32八)

かの 人々(は) 薄暗く なられて 立って 残った

[17] tende Ögedei qahân ebedčün kürtejü aman kelen

そこに オゴデイ・カンは 病気に 至られて 口舌(の感覚)が

jabqan aljagdarun (十二21三)

なくなって つらくなられる時

[15]「jilda bolda-」と[16]「baru'ân bolda-」の「bol-da-」は自動詞「bol-」(なる)に受身の接尾辞「-da」が付いた形である。「気がついてみたら、夕暮れになっていた(知らぬまに、暗くなっていた)」の意味で、「薄暗くなる、夕暮れになる」ことを表す。[17]の「jabqan」は「何かあるものが思いかけずなくなる、失われる、知られなくなる」の意で、受動形の「alja-gda-run」の語幹「alja-」は「困る、つらくなる」の意味を表す。つまり、「(aman kelen) jabqan aljagdarun」は「口がきけなくなってつらくなる、話せなくなる」の状態性を表す受動形である。

4.1b. 【可能】可能の受動文は可能の他に義務の「〜ベキ」の意を含むことがあるので、義務可能の受動文と呼ぶ。

義務可能の受動文は「ker」（如何に、どのように）、「yekin」（どうして）等の疑問詞、否定辞の「ülü」と「ese」（～ない）を伴って不可能の意を表すものばかりである。従って、受動文の可能用法は否定の語を伴う形式に限られていたと考えられる。

[18] kũ'ũn ügülen bö'ètele yekin ülü büşiregdekü keyên （五43四）

人（が） 言っているのに どうして 信じられないのか と言って

[19] eye-dür man-u oroqu ulu'u-yi ker medegdekü （十一六一）

和議に← 我々の 入るか 否かを 如何に 知るべき

[20] yesün qonog ideyên ügei aju nere ügei ker ükügdeküj （二15十）

九 泊 食物 なく 生きて、名なく どうして 死ねよう

[18]「yekin ülü büširegdekü」（どうして信じられない）,[19]「ker medegdekü」（如何に知るべき）,[20]「ker ükügdeküj」（どうして死ねよう）は、「どうやって信じられようか、知れましょうか」、「世の中に名なしでどうして死なれよう」の意味で、相手に対して不満や詠嘆の気持ちでもって問い掛ける表現である。

[21] jasag kürte'esü bidan-a ja'atugai, ükü'üldekü yosutu bö'êsü

法に 触れれば 我々に 告げるよう、死なれる 理をもつ者が いれば

bida mökör'i'ülüd-je, kese'êgdekü yosutu bö'êsü bida

我々が 斬らしめるぞ、懲戒されるべき 理をもつ者が いれば 我々が

söyüd-je （十二45八）

考えさとするぞ

[22] mönü qoyina maqa urug-tur minu öleŋg-dür qui'âsu

この 後 はてさて 親族（子孫）に ← 私の はますげに 包んでも

hüker-e ülü ide-gdekü e'ükün-dür qui'âsu noqai-a

牛に 食べられない（様な者）、脂肉に 包んでも 犬に

ülü ide-gdekü töre'esü （十一31七）

食べられない（様な者）が生まれれば

受動形の「ükü'ül-de-」「kese'ê-gde-」「ide-gde-」に形動詞語尾「-qu」「-qun」

が接続され、名詞句の修飾語（連体形）となっている。意味は義務可能の「ラ
ルベキ」で、「死ぬべき／懲戒するべき（もの）」となるが、[22] は否定語「ülü」
（～ない）を伴って不可能を表す。

4. 1c. 【受身】受身的な意を表す受動形が多い。主語が有情物或いは有情物
に属するもので、利害を表す場合が多いが、利害の意を伴わない中立的なもの
も存在する。

[23] Togto'â tende šiba-yin sumun-a tusdaju unaju' (八2九)

トクトアは そこで 流れの 矢に 当てられて 落ち倒れた

[24] yesün keleten irgen Teb-tenggeri-dür č'üldaju (十35五)

九つの 言語をもつ 人衆を テブ・テンゲリに よせ集められて

又、大崎（2006）で指摘されているように文語の受動文は語単位だけでは
なく、動詞句或いは従属節という大きな単位を対象とする特徴を持つ。そし
て主語或いは補語が背景化されている場合があり、前後の文章（名詞句の伴
う再帰所有格助詞）から読み取らないと理解が難しいものもよく見受けられ
る。

[25] sūldertü beye činu kūrčü iregdejü sūlder-eče ayuba (十一8七)

御稜威ある 御身に（汝の）到り 来られて 御稜威を 畏れた

[26] Senggüm baiyilduqu bolun morin-u-'n guya qagdaju

セングムが 対戦する ことになり 馬の←自分の 後足を 射られ

abdaqu bolju (五34九)

捉えられる（ことに）なって

[27] gurban Merkid-te genen büküi-dür irejü eme kö'ü-ben

三姓 メルキド族に 油断して いる時に きて 妻子を（自分の）

dajliju abdaba (三1二)

掠め とられた

普通、二つの動詞が並ぶ動詞句は、[25] のように前の動詞は、「-ju-」等の
副動詞語尾（連用形）を伴い、連接的及び同時的な動作・行為を表すが、[26]

の場合は動詞がそれぞれ受動形になっていて、「馬の後足が射られ、(敵に)捉えられた」という連続的な動作を表す。[27]「**irejü eme kö'ü-ben dauliju ab-da-**」の「来る」と「掠め取る」という行為の主体は「**gurban Merkid**」(三姓メルキド族)である。行為を示す述語動詞のうち、最後の述語動詞のみを受動形にして、「三姓メルキド族に来られる」と「妻子を掠め取られる」という二重の受身的な行為を、全体を包む込む形で表現しているのである。因みに、現代モンゴル語では受動形の動詞を並立して表現したり、大きな単位(従属節)をまとめたりする表現は成立しないので、これは文語の受動文の特徴であると言える。

『元朝秘史』の言語にみられる自動詞による受動文の場合は、もとの自動詞文に存在した「主格」を「二格」(与位格)名詞句にすることによって作られ、日本語の自動詞からの受動文のような被害・不利益の意を伴わないものがある。

[28] **Jürkin-e ire-gdekü-e-ēče jirgo'an üdüd külicejü yadaju** (四13六)

ヂェルキン族に 来られるより (前に) 六日間 何とか待ったもの

[29] **Naqu-bayan kö'ü-ben Bo'orču-yi jabqaju nisun nilbusu-bar**

ナク・バヤン 子を (自分の) ボオルチュを 失って 鼻水 涙をもって

aju'u. genete gürtejü kö'ü-ben üjejü nikente uiyilamu

あった 突然 到られて 子を (自分の) 見て 一度 泣き

nikente dongqodumu (二34七)

一度は 叱責する

自動詞「ire-」(来る)、「kür-」(到る)は移動動詞であり、「二格」名詞句を補語にとり、対格補語をとらない。[28] はチンギス・カンがタタル征伐のため応援を求めたヂェルキン族の到着を待っている状況で、「**jürkin-e ire-gde-**」ということはチンギス・カンにとって迷惑ではなく、むしろ期待して待つほどの良い事態を表す。[29] も同じく、息子を亡くしたと思って悲しんでいたナク長者のところに生きて息子が戻ってくことで、「**genete gürte-**」は主語のナク長者にとって嬉しい状況である。

4. 1d. 【尊敬】かつては接尾辞「-da-」をもつ動詞の受動形が相手を尊敬する意を表していたようで、『元朝秘史』では、尊敬の表現と解される動詞「ög-」（与える）の受動形「ög-te」（与えられる）の用例がほとんどである。

[30] gürejü ülü ögtekü mörtei či, kürte'esü
 (わざわざ) 請うて 与えられない 道がある 汝は、到られれば
 idekü yosutai či (二2九)
 食べる 道理がある 汝は

[31] irge-bên ba e.se ögtejü Odčigin (十35 一)
 人衆を(自分の)も 与えられないで オドチギン(は)

[32] ügülegsen üges sedkijü ker qandaqu ta (九25一)
 言った 言葉(を) 想って どのように 満足されようか お前達

[30]の動詞「ög-te」（与えられる）は「(貴人が民衆や下臣に物を)与えなさる」の意味で、尊敬語として用いられている。また、文中の「kür-te-」は「到る」の他に、謙譲語の「いただく」の意味も持つ。つまり、これは謙譲語の「kür-te-」と尊敬語の「ög-te-」（与えなさる）を対立的に用いた待遇表現で、文中の登場人物の上下関係を明確にしている。この文章は、オルバイ・ソカタイの二人の後達はイエスゲイ・バアトゥルを亡くして子供達と残ったホエルン・ウゼン母を見下して言った言葉である。[31]では、「与える」行為の主體はチンギス・カンであり、「人衆を与えなさる」と尊敬の意を含んでいると思われる。[32]「qan-da-」の「qan-」は「満たされる、適う」を意味する動詞語幹で、これに接尾辞「-da」が付いた受動形である。文章の前後関係からみると「お前達はどのように満たされようか」即ち、「どんな事をしてお前達の希望を満たしてやろうか(なんなりと望みを言うがよい)」という意味で、(チンギス・カンの)諸君に対する敬意を表す言い方である。

4. 1e. 【使役】使役的な意味を表す受動形が存在する。これは、『元朝秘史』の言語の一つの特徴とされ、小澤(1997)は「自動詞の使役形」と呼んでいる。全巻を通して三例しか見出せないが、文語の受動文には使役用法があったことが確認できる。

- [33] eke-yi qilinglagdaju ayun ba ayuba (十31一)
母を 怒られて 恐れに 恐れた
- [34] Yesügei qan imayi ö'ër-dür-iyén iregdejü (五10四)
イエスゲイ・カンは 彼を 自分の処に 来られて
- [35] Činggis qahan jarlig bolurun iluqu-burqan-a Šidurgu
チンギス・カンが 勅 するのに イルク・ブルカンに シドゥルグの
nere ögču lluqu-burqan Šidurgu-yi iregdejü (十二10六)
名を 与え イルク・ブルガン シドゥルグを 来られて

[33] の「eke-yi qilingla-gda-」(傍訳は《母行 被怒着》)は文法的に変わった表現である。普通は、「eke-yi」(母を)の後は「qilingla-ül-ju」(怒らせる)と使役形であるべきであって、「qilingla-gda-ju」(怒られる)と受動形になるならば「eke-yi」ではなく、「eke-de」(母に)と「二格」でなければならない。日本語的な発想からみれば、「eke-de qilingla-gda-ju」(母に怒られる)の方が自然な言い方となる。[34] [35] も、そのまま読めば「彼を来られて」「シドゥルグを来られて」となり、日本語の表現として不自然な感じがする。そこで、「iregde-」を「来させる」と読み変えなくてはならない。モンゴル人の理解では、時によって受動形を使役形に読み変えることがよくあり、この場合も受動形の「iregde-」を「(～を)来させて」と理解する方が自然である。

この用例について、前記の大崎(2006)では、受動接尾辞が大きな単位である「節」を対象にする用例とみて、[33]は「母が怒る」、[34]は「彼が来る」という行動を受ける受身的な意味で解釈し、一つの文にもう一つの文が埋め込まれた複合的な構造をもつ受動文としている。

確かに、この三例のみから受動形に使役の意味を表す用法があったとは言い切れず、大崎説のような解釈も可能である。しかし、「ヲ格」名詞句を伴い、自然と使役の意味で理解することができるため、本稿では、使役を表す受身表現と考えたい。

以上の検討より、現在、主に自発的なものや自然現象を表現する傾向となっている受動は、かつて文語においては自発以外に、可能、受身、尊敬、使役の意にも用いられ、その用法範囲が広がったことが明らかである。

4.2. 使役形

『元朝秘史』には、多くの使役文が存在する。基本的には、使役の「サセル」、恩恵の「テモラウ」、受身の「(ラ)レル」の用法を持ち、現代語とはあまり変わらない。しかし、『元朝秘史』特有なものと思われる使役形で自発、尊敬の意を表す用例が存在する。

『元朝秘史』の使役文を意味用法により、a. 使役 (恩恵)、b. 自発、c. 受身、d. 尊敬に分けて、その具体的な用例を分析する。

4.2a. 【使役】モンゴル語では使役形で使役の意味だけではなく、「テモラウ」の意味を表すことがある。使役文の形式は、使役形の述語動詞は「ヲ格」或いは「ニ格」の名詞句を直接目的語にとる。

[36] Temüjin čī ulus-un ejen bolu'âsu namayi jī'âgsan-u tula
テムジン、お前は 国の 主人 となれば 私が 告げたのだ から
ker jirga'ûlqu (三39五)
どのように (私を) 楽しませるか

[37] šili'ün berined ökid-i anu maga abčira'ûlju gar köl anu
よりすぐりの 嫁達 娘達を←彼らの はて 連れて来させ、手足←彼らの
ukiya'ûlju üni'éd qonid-iyn maga sa'a'ûlqun ele (七9 四)
洗わせて 乳牛達 羊達を (自分の) はて 搾らせるべき かな

[38] Šigi- qutuqu ö'er-iyên teyin soyurqa'ûluḡ baraju garču (八32三)
シギ・クトゥグは 自分を そのように 嘉賞させ 終わって 出て

何れも相手に働きかけて何か動作・行為をさせることで、その「サセル」行為は許可・放任 ([36]) や強制的 ([37]) な内容を含意したり、或いは相手に自分の利益になること ([38]) をさせたりする意味を表す。

4.2b. 【自発】自発を表す使役文が少数ながらも存在する。

『元朝秘史』に現れる動詞「bol-ga-」(ならせる、させる) はほとんどの場合、使役を表すが、自発の意を表す用例がある。又、動詞「geyi-」(明るくなる) は「(üdür) geyi'-ül-」、動詞「šingge-」(沈む、染み透る) は「(naran)

šingge'-ül-」と使役表現で自発を表す用例が見られる。

[39] üdür gegeyên bolgaju üje'ésü (六12一)

日(を) 明るく させて、見れば

[40] manager erde üdür geyi'ülün (五31四)

あくる日 早く日(を) 明けさせて

[41] naran šingge'ülün mün tende sitüldüjü (四38四)

太陽(を) 沈ませて その そこに 対峙して

[39]「üdür gegeyên bolgaju」は日本語に直訳すれば「日を明るくならせ」となる。自動詞「bol-」に使役の「-ga-」が付き「ならせる、なす」の使役形となっているが、意味は使役ではなく、「日が明るくなる、夜が明ける」である。[40]「üdür geyi'ül-」(日を明けさせる)、[41]「naran šingge'ül-」(日を沈ませる)は、「夜が明ける、夜を明かす」「日が沈む」である。これが自然現象の描写で、「夜を明かす」等には「何とか早く夜が明けないものか」という感情の現れがみられる。

現代語では、使役形で自発を表す用法はなく、この使役表現は自発の意味では用いられないが、古くは、自発的な意味が存在しており、それが状態性の自然現象の描写表現であったと考えられる。

4. 2c. 【受身】使役形で受身的な意味を表す使役表現が存在するが、この用法は現代語でもよくある現象である。表現形式は「ニ格」或いは「ヲ格」をとり、何れも利害の意を表す受動文の場合と同じく、動作主と対象が人間及び人間に属する事物に限られる。

[42] gurban Merkid-un Uduyid-ta Burqan-qaldun-ni

三姓 メルキド族の ウドゥイト氏に ブルカン・カルドゥン山を

gurbanta guš'i'ülju ayu'ül-dala'a bi (八10四)

三度 めぐらさせ 恐れさせられた 私は

[43] de'ü-ner-iyên teden-e teyin k'i'üljü ker üjejü amu (十37七)

弟達を(自分を) 彼等に そのように させて、どうして みて いるのか

[44] Erdis-i ketülürün čub tusču olonki-yn usun-dur ükü'üljü'üi (八3五)

エルディシ河を 渡る時 溺れて 多くを←自分達の 水(中)で 死なせた

[44] の場合は、「水中で死なせてしまった」という受身的な意味で解される使役表現である。現代語においても、使役形は「öbčin-ër ükü'ül-」(病気で死なせる→病気で亡くす)「čono-d ide-ül-」((家畜を)狼に食べさせる)というように、自分の力ではどうにもならない動作・行為が起こり、それが受身的な結果となる意味で用いられる。

4. 2d. 【尊敬】 尊敬の意を表す待遇表現とみられるものが僅かながら存在する。

[45] čerig bū gartugai ke'êbe. eyin ke'ê'ül'êd jarlig dabaju (十6六)

軍(に)出ないようにと云った。このように 云わせて 勅(を)破って

[46] Ögödei qahan öêr-iyên qan ergü'üljü (十二15二)

オゴデイ・カンは 自分を カンに あげさせて

[45] 「(eyin) ke'ê'ül-」の直訳は「(このように)云わせる」となり、この「云わせる」の動作主は社会的に「優位者」と位置づけられているチンギス・カン自身である。そのためこの文章は、「わしにこのように云わせて」の意を含む自己尊敬表現と考えられる。[46] は(オゴデイ・カン)自分がモンゴル帝国の最高位にあるものとして、自らによってではなく、「己を(衆人によって)あげさせる」と間接的な言い方をしていたと思われる。

5. おわりに

最後に、『万葉集』と『元朝秘史』の受動文及び使役文の用法を対比させて、その内容を簡単にまとめる。

『万葉集』	『元朝秘史』
《受動表現の場合》	《受動表現の場合》
自発では、心理的・精神的状態を表すものがほとんどで、その表現形式が固定化する傾向がみられる。	自発では、自然現象描写の状態を表す表現がほとんどで、表現的に固定化している。

可能用法は、打消の表現を伴い、人間の心理的現象など自発的行為を否定する不可能の用法に限られる。

受身用法は、人間を主語とし、利害の意を表す他動詞の受動文が圧倒的に多い。非情物の受動文は僅かながらも存在する。自動詞の受動文は自然現象を主語とした状態性の描写表現である。

《使役表現の場合》

単純な使役の意を表すものばかりで、用例が比較的少ない。

尊敬の用法は未発達であるが、使役から尊敬へと意義転化する過程を確認できる用例がみられる。相手の行為について、直接ではなく、誰かに「サセル」という間接的な言い方である。

可能用法は、何れも疑問詞や否定辞を伴い、心理的現象の否定、不可能を表す場合に限られる。

受身用法は、主語が有情物のものばかりで、受動文が成立するのは「有情の受身」に限られる。非情物の場合はその非情物が主語になることはなく、その所有者を主語として受動文が作られる顕著な傾向がみられる。

《使役表現の場合》

現代語と同じく、使役・恩恵・受身の用例が数多く存在する。

尊敬を表す待遇表現がみられるが、それは相手又は自己行為について間接的に表したものである。

自発の意のものも少数ながら見出せるが、そのほとんどが自然現象を表す状態性の表現である。

このように、日本語とモンゴル語は、受動態を発達させたか、使役態を発達させたかの違いはあるけれども、その表そうとする意味には共通する点がある。また、受動形が受身、自発、可能、尊敬の意を派生したり、使役形が使役以外に尊敬の意味も派生させるその発想法が非常に似通っており、共通性が高いことがわかる。

両言語にみられる種々の用例を通して次のようなことが考えられる。自然、春夏秋冬という四季の順行の中に生きる両民族にとっては、古来より自然は尊ぶべき存在であり、それと闘って克服するという思想はなく、自然のままであることは人生・運命と思われていた。そして、自然の成り行きによって得られるものは（自然）可能であるという思考法を持っていた。その発想が似ているため、言葉として表現化される際に類似点が現れてくる。

しかし、両民族の文化や生活環境が異なるため、言葉には相違点も現れる。

モンゴル人は土地に定着せず遊牧生活を営み、自然の中で生活する中で、広野での移動によって人々と出逢い、様々な人間関係を持つ。一方、日本人は稲作農耕を営み、限られた土地に定着して生活し、人間の移動は限定されているため、狭い人間関係を持つ。それぞれに異なる人間関係が成立した結果、人間関係に関する言葉、例えば、利害を表す表現形式が違ってきたのだと思われる。

<注>

- (1) 13世紀のもので、モンゴル語を漢字音訳した十二巻に及ぶ歴史物語である。後に、モンゴル語がローマ字に転写され、日本語に翻訳されている。例えば、

^ᠤ忽必来 那牙泥 ^ᠠ合^ᠦ児魯兀^ᠮ 途^ᠦ児 察兀^ᠦ刺兀^ᠮ韻

Qubilai noyan-i Qarlu'd- tur ča'ūra'ülba (十十四)

クビライ 長官を カルルグ族 に 出征させた

- (2) 各用例に付した邦訳文はおおよそ小澤（1984～1989）によった。単語に関しては「Cinggis qahan」を「チンギス可汗」と訳しているが、ここでは、わかりやすくするため、「チンギス・カン」とする。又、用例の解釈や語法的な説明のため原文の邦訳に訂正を加えている。

用例の邦訳中に現れる(←)記号は再帰所有語尾や人称所有を示す。再帰所有語尾とは格助詞、後置詞、一部の副動詞のあとについて、「(主語にとって)自分の～」の意味を付け加える。人称所有は「私の、あなたの、彼等の、その」等の意味を付加する。例えば、用例 [19] の「eye-dür manu」の「manu」、[22] 「urug-tur minu」の「minu」は人称所有の副助詞で、前者は「我々の和議に」、後者は「私の親族(子孫)に」という意味を表す。

- (3) 金水敏（1992）では、話手は動作主（主語）寄りの視点を取り表現することが一番容易で、わざわざ動作の対象（目的語）よりの視点をとることは困難であるとしている。
- (4) モンゴル語文語の受動態接尾辞には母音交替による幾つかのパターンがあるが、ここでは「-gda-」は異形態の「-gde-」「-qda-/kde-」を代表し、「-da-」は異形態の「-de-」「-ta/-te-」を代表する表記とする。

<参考文献>

大崎紀子（2006）『元朝秘史』の言語にみられる受動文—日本語の受動文と対比する

- 観点から」『ユーラシア諸言語の研究』『ユーラシア諸言語の研究』刊行会
大野晋（1967）「日本人の思考と日本語」『文学』岩波書店 Vol. 35 No. 12
小澤重男（1997）『蒙古語文語文法講義』大学書林
栗林均・确精扎布（2001）『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』
東北大学東北アジア研究センター
小路一光（1980）『万葉集助動詞の研究』明治書院
木下正俊（1972）『万葉集語法の研究』塙書房
小杉商一（1979）「非情の受身について」『田辺博士古希記念国語助詞助動詞論叢』
桜楓社
金水敏（1992）「場面と視点—受身文を中心に—」『日本語学』Vol. 11 No. 9
清水慶子（1980）「非情の受身の一考察」『成蹊国文』No. 14
中島悦子（1988）『『万葉集』における「非情の受身」』『会誌』日本女子大学
大学院の会 No. 7
中西宇一（1978）「自発と可能—「る」「らる」の場合—」『女子大国文』
京都女子大学国文学会 No. 83
宮地幸一（1968）「非情の受身表現考」『近代語研究』第二集
吉田金彦（1973）『上代語助動詞の史的研究』明治書院

（グ. バーサンフー 本学大学院文学研究科研修員）